騒音

藤野一花

まただ！

男は耳を塞いだ。それだけでは足りなかったのか布団の中に頭を入れた。ここまで彼を悩ませていたのは、隣りの住人の騒音だった。

男はマンションに住んでいる。急の転勤で単身赴任することになり、先月引っ越して来た。最初は料理やら洗濯やら今まで妻に全てやって貰っていたものを自分でしなくてはならず苦労していたが、慣れて来ると結構快適に思えて来る。

だが、二、三日前からものすごい音が隣りの部屋から聞こえて来るようになったのだ。まるで、何かを叩く様な……。これではまともに寝られやしない。

お陰で、男は毎日寝不足のまま仕事へ行かなくてはいけなくなってしまった。

けれど、ついに営業成績不振という理由で部長に呼び出されてしまった。

「一体、どうしたというんだ」

「はい、申し訳ありません」

「営業成績ではトップを維持していた君が。何か悩み事でもあるのか？」

部長は世話好きでよく相談を受けている。そのせいか部下からの信頼も厚い。男は隣りの住人の話を部長に相談した。

仕事の帰り、男は部長に話したせいか、少し気分が軽くなっていた。部長も注意した方が良いと言っていた。良く考えると今まで我慢してきた自分が馬鹿らしくなってきた。一度、文句を言わねば気が済まない。

男は自分の部屋を通り過ぎ、真っ直ぐ隣りの部屋の戸をノックした。

「はーい」

中からは間の抜けたような返事が聞こえて来た。

それが男の神経を逆撫でし、怒りをさらに悪化させた。
「夜中、うるさくて寝られないんだが。周りのことを考えたらどうなんだ！」
「あ！　すみません」
相手があまりにすんなり謝ってしまったので、男はこれ以上怒りを何処にぶつけたら良いか分からず黙ってしまった。しかし、男の目が相手の部屋の中のあるものを捕えた。その瞬間、怒りは恐怖に変わった。
「あの、実は仕事で使うものがあるんですけど、どうしても静かに作業が難しくて……。まだ仕上がらないんですよね。あと少し、ご迷惑おかけします。本当にすみません」
青年の言葉は、男の耳には半分しか入ってこなかった。男が自分の部屋に入るまで、青年は謝り続けていた。

三日後、青年の部屋の戸を誰かがノックした。
開けると一人の男が立っていた。
「あの、どちらさまでしょう」
男は素早く警察手帳を見せた。
「刑事さんですか」
「実は、隣りの家の方がここ数日、心臓発作を繰り返した後亡くなられました。ご家族の話ですと、心臓が極端に弱かったようですが、発作は子供の頃に完治していたようで、事件の面からも捜査しているのです」
「あの人が、心臓発作で……。この前来た時はあんなに元気だったのに」
「会われたんですか？」
「はい。実は僕、仕事で演劇の大道具関係に携っていまして、その作業の音が迷惑になってしまって、お話しにみえたんです。つい、三日前です」
「なるほどね。ところで、あれは？」
刑事は青年の部屋の奥を指差して言った。
「ああ、これですか？　よく出来ているでしょう。

近くで見ます？　マネキンの死体です」
「マネキンですか。今は技術がすごいんですね。本物かと思って心臓が止まりそうになってしまいましたよ」

【完】